

# 疲労

国木田独歩

青空文庫



京橋区三十間堀さんじゅっけんぼりに大来館たいらいかんという宿屋がある、まず上等の部類で客はみな紳士紳商、電話は客用と店用と二種かけているくらいで、年じゅう十二三人から三十人までの客があるとの事。

ある年の五月半ばごろである。帳場にすわっておる番頭の一人ひとりが通りがかりの女中を呼んで、

「お清きよさん、これを大森さんのところへ持って行って、このかたが先ほど見えましたがお留守だと言って断りましたって……」  
と一枚の小形の名刺を渡した。お清はそれを受けとって梯子段はしごだんを上がった。

午後二時ごろで、たいがいの客は実際不在であるから家内やうちしん

としてきわめて静かである。中庭の青桐あおぎりの若葉の影が拭ふきぬいた廊下に映つてぴかぴか光っている。

北の八番の唐紙からかみをすつとあけると中に二人ふたり。一人は主人の大森亀之助かめのすけ。一人は正午前から来ている客である。大森は机に向かつて電報用紙に万年筆まんねんぴつで電文をしたためているところ、客は上着を脱いでチョッキ一つになり、しきりに書類を調べているところ、煙草盆たばこぼんには埃及煙草エジプトの吸いがらくしやくしやくに突きこんである。

大森は名刺を受けとつてお清の口上をみなまで聞かず、

「オイ君、中西が来た！」

「そしてどうした？」

「いま君が聞いたとおりサ、留守だと言って帰したのだ。」

「そいつは弱つた。」

「彼奴きやつ一週間後でなければ上京でられないと言って来たから、帳場に彼奴きやつのことを言っておかなかつたのだ。まあいいサ、上京で来て来てくれたに越したことはない。これから二人で出かけよう。」

頭の少しはげた、でつぷりとふとつた客は「ウン」と言つたぎり黄金縁きんぶちめがねの中で細い目をぱちつかして、鼻下びかのまつ黒なひげを右手めででひねくりながら考えている。それを見て大森は煙草たばこを取つて煙草盆をつつきながら静かに、

「それとも呼ぼうか？」

「まあ、そのほうがいいな。こつちが彼奴きやつばかりに頼たよっているよ

うに思われるのは、ばかげているからな。」

大森は「ちよつと」と言つて、一口吸つた煙草を灰に突っこみ、机に向かつて急いで電文を書き終わり、今までぼんやり控えていたお清にそれを渡して、

「すぐ出さしておくれ。」

お清は座敷を出た。大森はまた煙草を取つて、

「それもそうだ、あの先生、りこうでいてばかだから、あまりこつちで騒ぐとすぐ高く止まつて、素直に承知することもわざとぐずりたがるからね。」

「それでいてこつちで少し大きく出るとまたすぐおこるのだ。始末にいけない。」と客に言つて大あくびを一ツして「とにかく呼

ぶとしようじやアないか。」

「いつ呼ぼう?」と言つて、これももらいあくびをした。

「今夜はどうだ。今呼んだつて彼奴宿きやつにいやアしない。」

大森は机の上の黄金時計きんどけいをのぞいて、

「二時四十分か。今はとてもいない。しかし」とまた時計をのぞいて、少し考えて「あすの朝早くしようじやアないか。中西が来たとなれば、僕はこれから駿河台するがだいの大將に会つておくほうがいいと思う。」

「なるほどそれはそのほうがいい。」

「それから今夜は沢田を呼んで、見本の説明の順序をよく作つておいてもらうことにする。」

「なるほど、そいつはなお大切だ。われわれだって中西が相手なら結構説明くらいはできるが、それは沢田に越した事はない。それじゃアそう決めた。これから手紙を持たしてやって、電話じゃアだめだよ、そして明朝午前八時までには御来車を仰ぐとでもしておこう。」

「よし、手紙をすぐ持たしてやろう」と大森は巻き紙をとつてすらすらと書きだした。その間に客は取り散らしてあつた書類を丁寧に取りそろえて、大きな手かばんに納めた。

「中西の宿はずいぶんしみつたれているが、彼奴きやつよく辛抱して取り換えないね。」と大森は封筒へあて名を書きながら言った。

「常じょうやど旅宿となると、やっぱり居ごこちがいいからサ」と客は答



えて、上着を引き寄せ、片手を通しながら「君、大将に会ったら例の一件をなんとか決めてもらわないと僕が非常に困ると言ってくれたまえ。大将はどうかして物にしてやろうというので手間取っているだろうが、それじゃア実際君の知つてるとおり僕がやりきれない、故郷くにのやつら、人にものを頼む時はわいわい言つて騒ぐくせに、その事がうまくゆくと見向きもしないんだ。人をばかにしてやアがる。だから大将に、どちらでもいいからだめだとかできるとか、明白に早く決定を与えてもらいたいと言つてくれたまえ、大将あれでばかに人がいいから、頼むとんでもかんでもそうしてやらなければならんと心得てるからやりきれない。中に立ってる者はありがた迷惑だ。」と言つてるうちに上着を着てし

まう、いつ大森がベルを押ししたか、女中がはいつて来た。

「これは奇妙不思議だ、中西へ手紙をやろうとすると、お蝶さんちようがやって来る、争えんものだ、」と大森が十七八の小娘に手紙を

渡す

「アラまたあんな事をおツしやる、中西さんなんかなんでもないワ、ほんとにあたしくやしいわ、みんなしてからかうんだものと手紙をふんだくるように取って「いいわ、そんな事をおツしやるならこのお手紙をどつかへうっちゃってしまふから。」

「イヤあやまった、それは大切の手紙だ、うっちゃられてたまるものか、すぐ源公に持たしてやっておくれ。お蝶さんちようはいい子だ

」。

「蝶ちゃんはいいい子だ、ついでに人車くるまを。」と客が居ゐずまいを直してあいづちを打った。

「田浦さん、はげが自慢にやなりませんよ」と言い捨てて出て行った。

まもなく車が来て田浦は帰り、続いて大森も美麗な宿車やどくるまで威勢よく出て行った。

午後四時半ごろになって大森は外から帰って来たが室へやにはいるや、その五尺六寸という長身を座敷のまん中にごろりと横たえて、大の字になってしばらく天井を見つめていた。四角な引きしまった顔には堪えがたい疲労の色が見える。洋服を脱ぐのもめんどろくさいらしい。

まもなくお清きよがはいって来て「江上えがみさんから電話でございます

。」

大森ははね起きた。ふらふらと目がくらみそうにしたのを、ウンとふんばって突つ立った時、彼の顔の色は土色をしていた。

けれども電話口では威勢のよい声で話をして、「それではすぐ来てください」と答えた。

室へやにかえるとまたもごろりと横になつて目を閉じていたが、ふと右の手をあげて指で数を読んで何か考えているようであった。やがてその手がばたり畳に落ちたと思うと、大いびきをかいて、その顔はさながら死人のようであった。

(終)





# 青空文庫情報

底本：「号外・少年の悲哀 他六篇」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年4月17日 第1刷発行

1960（昭和35）年1月25日 第14刷改版発行

1981（昭和56）年4月10日 第34刷発行

入力：紅 邪鬼

校正：鈴木厚司

2000年7月10日公開

2004年6月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 疲労

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>